

ドイツ人・日本人の子どもがともに満足できる交流活動の実践

前ハンブルグ日本人学校 教諭

青森県南津軽郡藤崎町立常盤小学校 教諭 佐藤 慎治

キーワード：国際交流、ドイツ、ダンス、サッカー、アンケート

1. はじめに

どの日本人学校においても、現地の子どもたちとの交流を行っていることだろう。ハンブルグ日本人学校も同様であり、幼稚部から中学部まで全学年が行っている。活動内容は、童謡の歌唱・習字・折り紙など日本の伝統的な活動が多く、それを日本人側が教えることに主眼が置かれている。その活動は継続していくべきだと考えるが、ドイツ人（大人と子ども）にさらに満足してもらい、同時に日本人学校の児童生徒にも満足してもらえるような活動はないか考えてみた。ともすればストレスの多い異文化交流を、より楽しく価値あるものになりたいと思い、下記のような実践を行った。

2. 本校で取り組んでいる夏季学校について

(1) これまでの交流の歩み

ハンブルグ日本人学校の夏季学校（Gromitz）で行われているドイツ校との交流は、最近の3年間では以下の通りである。

24年度：サッカー 日本の昔遊び スポーツ

25年度：サッカー アンケート 幼稚園児との交流 スポーツ

26年度：サッカー ダンス アンケート サッカー観戦（パブリックビューイング）

オリエンテーリング ドイツ人に挨拶と自己紹介をしながら交流しサインをもらう活動

テントや遊び場での交流（英語やドイツ語での会話）スポーツ

(2) 実施に当たってドイツ側の問題点

- ①同じ日にキャンプ場に来るドイツの学校に事前に連絡をすることはできない（プライバシーの問題）ため、当日になってみないと交流できるかどうか分からない。
- ②ドイツ人の教員は、日本人学校ほどには交流に積極的ではないし、児童生徒に交流を強制しない（法律上の問題）。そもそも、交流の必要性を感じていない。
- ③人種差別的な問題。ドイツ人の多くが友好的であるものの、そのような問題があることは確かである。
- ④ドイツ人の子どもは、あまり相手の気持ちを斟酌しないため、自分がやりたくないと思ったら活動をすぐにやめてしまう。一緒に活動している日本人の児童生徒をその場に残し、別の場所で自分のやりたいことをやってしまうことが多い。

これらの問題のため、日本人教員が考えているような交流がなかなかできないのが現状である。

(3) 実施に当たって日本側の問題点

- ①日本の伝統文化を伝えることに主眼が置かれているので、童謡の歌唱・折り紙・習字・けん玉等の活動が比較的多い。それらの活動は「自分たちで」考え出したというよりは、今まで行われていたから実施していることが多く、児童生徒にとって日常的にそれらの活動は行っていない。また、それほど長時間、夢中になれるほどの活動でもない。
- ②交流をストレスと感じる児童生徒の存在
海外生活を始めたばかりの児童生徒によく見られるが、言葉が通じない相手と交流することに心理的な抵抗を感じてしまう。

③例年通りでいいという雰囲気

良い点を踏まえたと例年通りに決まるのであれば良いのだが、面倒くさくないものを児童生徒が選択してしまう雰囲気があった。

これらを踏まえ、今まで成功してきた交流活動は継続し、それ以外の活動については新たに計画することにした。

3. 日本人学校での事前指導

自分は主担当として2回、夏期学校の活動を計画してきた。中でも、特に成果が見られた2回目の活動について述べてみたい。

まず、ドイツ側の問題点2(2)の①~③であるが、これらは改善が難しい。そのため、④の「やりたくない」という気持ちを持たせないような楽しい活動を考えることにした。その際に思い出したのは、フォルクスシューレの先生から言われた「日本人はダンスが嫌いなの？」という言葉だった。地元のギムナジウムでもダンスパーティーが何回も開催されており、ドイツ人には歌や踊りが大好きな人が多い。そこで、ドイツの児童生徒が興味を持ちそうなダンスを交流活動に取り入れようとする意識が自分の中で高まった。

次に、日本人学校側の問題点2(3)の①③であるが、これらは「面倒」という意識が根っこに存在する。また、教員が決めたことをそのまま行う(一方的に決められてやらされる)ことを嫌う傾向が強い生徒や保護者も存在する。その結果、前年と同じで良いという流れができやすかった。そのため、次のようなことに留意し、改善に取り組んだ。

A 班長となる中3への働きかけ

B 人数が多く活発な5年生への働きかけ

・Aに関して

中学部3年生には何事にも前向きに取り組み、素直な生徒が多いことから、折にふれてより充実した夏季学校について話し合った。授業後の雑談や班長会議で彼らの話を聞き、新しい取り組みとして「ダンス」「国際交流」の話題を出した。何度も話し合った結果、強制という形を取らずに変化を受け入れてもらうことができた。

・Bに関して

5年生は楽しいことが大好きなクラスであり、以前自分が担任をしていたこともあり気心が知れている。そこで、ダンスに抵抗を見せる中学部より、まず小学部にダンスレッスンを実施した。楽しく踊っている様子を中学部に見せることにより、心理的な抵抗を減らしていくことをねらいとした。

踊りに使ったのは次の3曲である

(1) フォークダンス「マイムマイム」

(2) フォークダンス「オクラホマミクサー」

(3) ハッピーシンセサイザ『EXIT TUNES PRESENTS Vocalonation feat. 初音ミク』収録。

ハンブルグ日本人学校では、小学部・中学部ともフォークダンスを体験することが少なく、踊り方もあまり理解できていなかった。ダンス指導は児童生徒にやらせようと考えていたのだが、今年が初めてということもあり教員が主導して踊りを教えることにした。小学部が楽しそうにダンスをしているのを見て、中学部も女子を中心に踊ろうという雰囲気ができ、最後には全員が楽しく踊れるようになった。特に中学部女子をやる気にさせたのはフォークダンスではなく(3)の初音ミクの曲である。YOU TUBEやニコニコ動画でよく見聞きし、さらには実際に振りを覚えている生徒もいて、とても意欲的に取り組んでいた。そのことによりフォークダンスを踊ることへの抵抗もなくなっていった。

次に日本人学校側の問題点②であるが、これは意外に難しい問題となった。相手のドイツ人に自分の気持ちを伝えるために、事前に質問する内容をドイツ語に翻訳させて対応した。しかし、心理的な抵抗感を改善させるこ

とはできなかった。根底には「言葉の通じない相手との交流によるストレス」が存在し、すぐに改善させることは難しいと感じた。そこで、ダンスやサッカーの時間を多くし、交流の楽しさを実感させ、異文化との交流に対しての抵抗を少しでも減らすことを目標にした。

4. 交流活動の成果と課題

当日は天候や相手校にも恵まれ、最高の3日間となった。その中で、特に交流の部分について結果を示したい。

(1) オリエンテーリング中のサイン、アンケート交流

前年度までは街の中央まで歩いて行く活動が主だったが、今回はオリエンテーリングを本格的に実施し、少しでも楽しみながら歩けるようにした。そして、その活動中にドイツ人に話しかけ、サインをもらう活動を取り入れた。また、オリエンテーリング終了後に日本に対するアンケート活動を班ごとに実施し、初日から交流活動に意欲的に取り組むことができた。

○成果と課題

学校で学習した言語を駆使し、ドイツ人に勇気を出して話しかけ、数多くのサインやアンケートに対する答えをもらうことができた。また、雑談に興じる班もあり、習った言語を実践する場ともなっていた。ドイツ人は説明を熱心に聞き、日本について知っていることを積極的に話してくれた。ただ、話しかけることに抵抗を感じる児童生徒も若干見られた。これは英語が得意な児童生徒のサポートにより対応できたが、これからも長期的な計画を立て、抵抗感の改善に取り組む必要がある。

(2) サッカー交流

だいたい日本対ドイツ戦となる。この活動は、やってもよし応援してもよしとやって損のない活動である。ドイツの子たちはフィジカルが強いため、同じ学年だと負けてしまうことが多い。

○成果と課題

スポーツの交流は盛り上がるし、やっている子と応援する子の両者が楽しむことができた。特に応援のやり方を工夫して部活動的なものにすると、ドイツの子どもたちが喜んでくれることもある。また、今回は終了してから個別にいろいろ話をしたり、明日も何人かでやろうと約束を取り付ける班もあった。終わった後で、ドイツと日本の子どもたちを混成したチームでやってみても良かったのではないかと感じた。また、サッカーが苦手な子の活躍の場をもっと増やしていけるような工夫をしたい（事前に横断幕を作るなど）。

(3) 日常的な交流（英語やドイツ語での会話）

サッカーでの交流をきっかけとして、ドイツの子どもたちが日本人側のテントに気軽にやってくるようになった。質問用紙を持っている子もいて、「たこやきとは何だ？」など、質問攻めにあっていた。

○成果と課題

サッカーやバスケットボールをやろうと誘いに来たり、日本のことを質問したりと、相手側はとても意欲的だった。また、日本側も英語で対応したり、ドイツ語が得意な生徒を介して交流を進めることができた。英語やドイツ語が苦手であると、自主的な交流活動になりにくいので、テントに1人は英語やドイツ語の得意な児童生徒を組み入れるなどの配慮が必要である。また、日本人側ももっと積極的に相手側のテントを訪問したいところである。

(4) サッカー観戦（パブリックビューイング）での交流

当日がワールドカップサッカー「ドイツ対オーストラリア」戦のため、一緒にドイツを応援することにした。日本人学校側では事前に応援グッズなどを準備した。

○成果と課題

ドイツが勝ったこともあり、和やかな活動になった。また、事前に仲良くなったドイツの子どもたちからフェイスペインティングをしてもらう児童も見られた。ドイツ国旗を振りながら、日本人がドイツを応援したことをドイツ人はとても喜んでくれた。さらに喜んでもらえるために応援の歌を歌っても良かったかもしれない。

(5) ダンスでの交流

当初フォークダンスやダンスを食堂（放送機器あり）で行う計画だったが、突然のキャンセルがあり放送機器が使えなくなった。そのため、あらかじめ準備しておいた携帯CDプレーヤーを使って、屋外で活動を行うことになった。

○成果と課題

ねらいとしていた室内で踊って盛り上がる活動ができなかったことは残念だが、外での活動のためドイツ人の子どもたちが活動に参加しやすくなっていた。屋外でのダンスの方が良い面もあると感じた。フォークダンスは簡単な踊りだったため、すぐにドイツ人の子どもたちも理解することができた。また、互いに手をつなぐことにそれほど抵抗がなく（ドイツの小学校4年生と中学校1・2年生）、何度も何度も繰り返し踊ることができた。

初音ミクの曲を使ったダンスでは、見よう見まねでかっこよく踊ろうとするドイツ人の子どもたちをたくさん見ることができた。また、ダンスが終わった後も日本人学校のテントを訪問して、自分たちの考えたダンスの振り付けを説明するなど、とても興味深く活動に取り組んだことが分かった。ドイツの先生方も笑顔で見学し、子どもたちに参加するように促していた様子がとても印象的だった。

5. おわりに

交流活動はともすれば「ドイツ校」のことを優先し、ホスト役となる日本人学校側の児童は楽しめないことも多い。それは、事前の言葉指導や準備に時間がかかることやお世話を優先するあまり、活動自体を楽しめないことも一因になっていると考えられる。ねらいによっては楽しくない活動になるのもやむを得ないが、工夫によってそれは改善できる。特に日本のアニメなど新たな文化を前面に出して交流することは、特に若い世代にとっては有効であろうと、この夏期学校を通じて感じさせられることになった。

今回のような宿泊を伴う活動では、児童生徒が大きく伸びるチャンスでもある。普段できないことやドイツ人との交流を「楽しい」雰囲気の中で行うことのできる絶好の機会である。そのために一番大事なことは①日本人学校の児童生徒、②ドイツ人の児童生徒、③日本・ドイツの教員、が活動を楽しむことである。ともすれば③は軽視されがちになるが、教員が楽しめないものを子どもたちが楽しめるはずがない。そして、楽しい雰囲気の中でこそ、ねらった目標が達成でき、教育効果が上がるものと自分は確信している。それを理解し、一緒に活動してくれた同僚と子どもたちに心から感謝したい。最後に、活動後の児童生徒のアンケート結果を紹介して報告を閉じたい。

大目標「笑顔と思い出にあふれる夏季学校」

参加児童生徒数 32名

◎十分に達成した	31名
○達成できた	0名
△少し達成できなかった	1名
×達成できなかった	0名



最後の記念撮影（ドイツ校と一緒に）